

太田常蔵『ビルマにおける日本軍政史の研究』東京：吉川弘文館，1967. xi + 586 p.

東南アジア諸国の現代史の盲点の一つは、日本が軍政をしいた戦争中の現地事情なのである。なぜかといえば、日本側の詳細な記録に基づく当時の研究が怠られてきたからだ。だから、たとえば、1943年に日本がビルマを独立させたとき、憲法を發布したが、従来の政治史研究者はその憲法条文を引用する際、英文資料から訳出するという奇妙な現象が生じていた。なかでもビルマの戦中事情の研究は、なぜか遅れていた。太田教授のたいへんな力作である本書は、そういうビルマ研究家の渇を癒やす待望の書なのである。ここ当分は、本書の右に出るビルマ戦中事情についての研究は出ないだろう。

本書は、当時の歴史の流れを有機的に要素分解して再構成するという分析の書であるよりも、どちらかといえば厳密な資料の *anthology* であるという感じが強い。この点は、歴史書と銘打った本書の欠点でもあれば長所でもある。ただ、豊富な資料が縦横に駆使されているので、従来未知のままに残された局面がかなりはっきりしたというメリットは、この際大いに高く評価されねばならない。

本書が日本側の資料を十全に踏まえたことの結果として、面白いことに、ビルマの戦中事情がかならずしも日本側資料だけでは掴めないという事実が判明した。この点は、本書が言わず語らずに感知させるまぎれもない事実である。太田教授は、意識的に、英語資料をさほど活用しておられない。それだけに、日本軍政府側資料によれない部分の叙述が、いささか薄っぺらくなっていると同時に同じ理由から、当時の歴史の流れの意義づけが甘くなり、歴史の構造的把握が弱いものになってもいる。これらの欠点を補うには、やはりビルマの民族主義者の手記や英国側の記録をも踏まえなければいけないのではないか。

このような意味で、第Ⅶ章の「反日統一戦線の結成」以下の個所は、資料的価値が乏しい。しかし、第Ⅰ章「ビルマ方面における作戦」にはじまる、文字通りの日本軍政段階の叙述は正に圧巻である。第Ⅳ章「ビルマ本土における軍政の実施」、第Ⅴ章「シャン州における軍政の実施」、第Ⅵ章「独立への胎動とその達成」の3章はずばぬけて資料的意義があ

る。

巻末には、全部で49篇に及ぶ史料が付録として付されており、きわめて有益である。年表も9分9厘まで正確で参考になる。いずれにせよ、今後は、本書における用語法を、日本軍政段階でのビルマについての決定的な用語法として用いることを提案したい。もっとも、ビルマ語表記に、不完全なところがある。なにはともあれ、本書の刊行を喜ぶことにやぶさかではない。(矢野 暢)

歴史・文化・考古学文献出版委員会編『南詔刻文』Bangkok : Prime Minister's Printing Office, 1967.

คณะกรรมการจัดพิมพ์เอกสารทางประวัติศาสตร์
วัฒนธรรมและโบราณคดี จารึกอาณาจักรน่านเจ้า
พ.ศ. ๑๙๘๐

本書の編集者である歴史・文化・考古学文献出版委員会はタイ国およびタイ族に関する歴史的文献資料の編集、印刷、発行につとめているが、これも同委員会の手になる最近の出版物の一つである。847年、南詔国の首府 Taiho-tch'eng にて刻されたという「金石萃編卷 160」のタイ語訳である。同碑文は南詔国の閣羅鳳王の時代と同王室で公務にたずさわっていた中国人によって作文されたもので、この時代の南詔国の一般的な状態の他に、同王の経歴、政策、戦争、外交関係等について詳しく記述した唯一の碑文で、歴史的にみて非常に重要なものだと言えるだろう。わずか100 ページくらいの小さな本であるが、このタイ語版が出るまでには、かなり多くの人と時間が費やされたことが、その前書からわかる。

本碑文が最初に安置された当時の首府 Taiho-tch'eng は大理の北約10キロの所であるが、中国がクブライ汗の支配下におかれると同時に、南詔国もその下に落ち、さらに明の時代に雲南省として中国の一部になったわけであるが、その間ずっと本碑文は捨てられたままになっており、清の時代にこの地方に派遣された役人王昶氏によって、再び発見されたものである。バラバラに割れた碑文をつぎ合わせて元通りに近い形にしたのであるが、全体で3,800語のうち判読されたのは800語のみである。最初、

1791年に王昶氏により *Yun-nan-t'ong-tche* に発表され、ついで1805年に同氏により *Kin-che-tsoei-pien* に載せられた。またさらに1807年に Che-fan 氏により *Tien-hi* にも載せられている。欧文では M. Edward Chavannes が *Journal Asiatique* に仏文を載せている。本タイ語版は歴史家の Nai Khacon Sukkaphaanit 氏が1964年にホンコン大学図書館にて、上記 Che-fan 氏の中国語版および Chavannes の仏語版をフォトスタットにしてタイ国に持ちかえたもので、フランス語からおよび中国語から両者のタイ語訳がおさめられており、原碑文の写真版も加えられている。フランス語版は美術局局長の Nai Thanit Yuuphoo 氏を経て Dr. Eugene Denis, S.T. により、また中国語版は Nai Chin Chumrum 氏を経て Luang Cin Yenkiat (Likhit Huntrakunn) 氏によりタイ語訳されたものである。

本碑文は中国人により中国語で書かれたもので、南詔時代のタイ語の資料にはならないが、数少ない歴史資料のうちでかなり詳しいものであるし、タイ語に訳されたのは本書が初めてであるから、歴史研究の資料としては非常に価値あるものだと言えよう。タイ国におけるタイ族に関する歴史(考古)研究は最近重要視され盛んになりつつあるが、漢籍の扱える研究者は極めて少ない。したがって、中国語版およびフランス語版の両者をタイ語訳し、原文も加えて1冊にまとめた本書は、タイの研究者にとって非常にありがたい資料と言わねばならないだろう。

(桂 満希郎)

クンウィットマートラー『タイ語の特質と変遷』Bangkok: Saansawan Press, 1965. ii+147 p.

ขุณวิจิตรมาตลา ลักษณะและวิวัฒนาการของภาษาไทย

本書は1967年1月19日より同年6月15日にかけて、Khorusaphaa のタイ語研究会(ชุมนุมภาษาไทย)にて行なわれた講義を1冊の本にまとめて出版したものであるが、タイ人によって行なわれたタイ語に

関する研究として意味あるものと言えよう。しかし、残念ながら、この期待は本書によってはかなえられないと言わなければならない。もっとも、著者自身も、専門的研究書として打ちだしているわけではないし、それよりもむしろタイ語についての取りとめの話と考えてほしい旨述べている(p. 3)ので、いたし方のないことかもしれない。本書はページ数もたいして多くはないし、章とか節とかに分けられているわけでもないが、内容的には、(1)タイ語と古代エジプト語、(2)タイ語における語グループ(“word family”と呼べるかどうかまだうたがわしいので仮にこう呼んでおく)、(3)タイ語とサンスクリットおよびパーリ語、(4)タイ語とタミール語、ペルシャ語、ヒンズースタニー語、アラビア語等、の四つの点について論じていることがわかる。

(1)においては、古来タイ国で行なわれてきた遊びの類に使用されている用語を古代エジプト語と関係づけて、同系の単語であろうと言う推定を下しているわけであるが、資料が少なくまた信頼できるものかどうか不確かなため信用しがたい。また、このことから大古の昔にさかのぼれば、タイ人とエジプト人とは同系民族であったかもしれないと言う項(p. 41)は、あまりにもかけはなれすぎていて突飛な感をまぬがれない。(3)および(4)は、主としてタイ語に入った外国起源の単語で、比較的原形のつきとめにくいものを取りあげて、その語形変化および意味変化の過程について説明したのである。(2)は、本書全体を通じて最も興味深い点で、これはタイ語における形と意味との類似した単語(例えば、/plian/ «to change»と /phian/ «to deviate»; /khlûan/ «to move»と /lûan/ «to move off»となど)を集めて、それらを同一のグループに属するものとするのである。この問題にふれたのは本書が最初ではないが、これについて組織的に研究を進めれば面白いものになる可能性は充分にある。先にも述べたように、本書は本格的な学問書でもなく、何らかの具体的な結論を出したものでもないために、言語学的研究と思えば失望するかもしれないけれども、ざっと通読しただけでも、研究問題となる可能性のある事柄を沢山含んでいるものである。先にあげた点以外にも、タイ語の接頭辞である /pra-, pa-, kra-, ka-/等に触れた点なども、な